

## 原 寛\*: 東亞植物註解 (11)\*\*

Hiroshi HARA\*: Comments on the East Asiatic plants (11)

42) ウラゲワレモコウ 先にナガボノシロワレモコウの有毛品について述べた際に (本誌 53: 234, 1978), ワレモコウでも有毛の変種が大井博士 (1953) により発表されていることにふれた。大井博士は長野県軽井沢町小瀬近くのツツジ平産 (1935) に基づいて記載されたが, 私は1928年神奈川県逗子町桜山で採集している。国立科学博物館には Savatier が日本で採集した標本 (no. 370) の一枚が送られてきているが, これが有毛品であって, 横須賀附近で採集されたものらしい。その後長野県霧ヶ峯 (1954), 愛知県作手 (1954), 兵庫県山本 (1956) で採集されており, 私も伊豆須崎の海岸に面した草地の斜面でワレモコウに交って有毛品が生育しているのを観察した。これらは小葉の下面にかなり多くの立った白毛が生えている。ごく最近志摩答志島でも有毛品を見たが, これでは茎や葉下面脈上に開出した多細胞の毛が観察された。注意して探せば有毛品は山地だけでなく海岸近くにも広く点在して見出されるものと思う。しかし変種として区別するほどのものではなく, 有毛品種として扱うのがよいと考える。ただ *Sanguisorba officinalis* L. はヨーロッパ, 中央アジアからシベリア, アラスカ, ユーコンにまで広く分布しているのに, 有毛品は他地域からは確認されていないのは面白い。もっとも *S. officinalis* var. *pubescens* Ganesch (1915) というものが発表されているが, これは *S. glandulosa* Komar. との雑種ともいわれ, どういうものかははっきりしない。

日本のワレモコウの学名についてはまだ問題が残されているが, シベリア, 中国などでの変異が十分に分らないと解決できない。

*Sanguisorba officinalis* L. var. *carnea* (Fisch.) Regel ex Maxim.

f. *pilosella* (Ohwi) Hara, stat. et comb. nov.

*S. officinalis* L. var. *pilosella* Ohwi, Fl. Jap. 648 (1953); in Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo 33: 76 (1953), cum diagn. latin.; Fl. Jap. ed. Eng. 538 (1965); ed. rev. 756 (1965).

Distr. Honshu.

43) トゲナシムグラ 札幌市羊ヶ丘に帰化した植物を村田源氏が *Galium Mollugo* L. と正しく同定されたが, 森田弘彦氏が植物分類地理 26: 188 (1975) に報告された

\* 東京大学 総合研究資料館植物部門。Department of Botany, University Museum, University of Tokyo, Hongo, Tokyo.

\*\* 本誌 57: 176-181 (1982) から続く。

際に、‘葉辺にのみ微細な逆鉤刺がある’と書かれたのは誤りで、この類は葉辺には上向した小伏剛毛があるのが特徴である。その後私も苫小牧 (1977) で採集し、釧路大葉毛 (1981) でも採られているので北海道では所々に帰化しているようである。

ところが1982年栃木県那須沼ツ原近くの路傍で生物学御研究所の川村文吾氏が採集され、これはヨーロッパの *G. Mollugo* の普通形とよく一致する。しかしその前年 (1981) にはほぼ同所で同氏が採られた標本があり、それは葉が倒卵形をおび、やややすく、幅 4 mm 位になり、上部の節では 4 葉、花序の近くでは 2 葉で対生になり、花数が少なくまばらにつき、花梗は細糸状で長いのは 9 mm にもなる。

細かく見ると札幌や苫小牧のものも普通形より葉が少し広く広倒披針形で、ヨーロッパで *subsp. elatum* (Thuill.) Syme 又は *subsp. tyrolense* (Willd.) Hayek と呼ばれている形に近く、花梗はどれも短かく長さ 2-4 mm である。上述の那須 (1981) の標本に一致する型は他に見当たらない。また浅井康宏氏によれば東京湾夢ノ島にも最近見られるとのことである。トゲナムグラは日本で一個所からひろがったのではなく、近年牧草などの種子に交って何回も外国から移入されたものであろう。

日本産としてはヤブムグラ (*G. Niewerthii* Franch. et Sav.) がこの仲間であるが、葉は倒卵形に近く幅は広く 4-9 mm になり、花数はごく少なく花序はまばらに 2 岐して散開し、花梗は細糸状で長さ 3-11 mm になり、基部に通常 2 小苞をつけている。以前は東京、横浜、千葉、藤沢、多摩などの丘陵林下でよく見られたらしいが、戦後はほとんど見当らず稀品となった。上記那須 (1981) がこれに似てくるが一致しない。

In recent years, *Galium Mollugo* L. has become widely naturalized in Hokkaido and Honshu of Japan, and some plants have broader and somewhat obovate leaves, loose few-flowered inflorescences, and long filiform pedicels up to 9 mm long.

44) ノコギリソウ Botschantzev (1961) がこの類の学名に *Achillea alpina* L. を採用してから、北村博士 (1968) もタイプの写真で判定されてこれに同意された。北村博士が述べられているようにこの類の分類は大変難しいが、種を少し広く見ればノコギリソウ類を *A. alpina* にいれることに私も賛成である。しかし、*A. alpina* L. の基準標本、即ちロンドン・リンネ協会にある No. 1017.13 (Fig. 1) を見ると、頭花の総苞は鐘球形で径 5 mm 位であるが舌状花冠はごく小さく長さ 2 mm にも満たず、この点ではヤマノコギリソウに似ている。したがって北村博士の限定された舌状花冠は長さ 3.5-4.5 mm というノコギリソウは *A. alpina* とは一致せず、その変種として扱ってよいと思う。ノコギリソウは日本北部でかえってキタノコギリソウ *subsp. japonica* (Heimerl) Kitamura との中間形があって区別の難しい場合があり、同一亜種に入れることが考えられる。ホロマンノコギリソウは私は別物と考えている。ノコギリソウと全く同じ型がシベリアや中国にまで分布しているかどうかは確認していない。私が見た

Dahuria, Amur, Ochotsk, Alaska 産の、これまで *A. sibirica* Ledeb. と呼ばれていた標本は舌状花が短かく 2 mm 位であり、これは *A. alpina* var. *alpina* と思われる。したがって北村博士 (1939, 1940 & 1981) の意味のノコギリソウには名がなくなるので、次のように命名しておく。

***Achillea alpina* L.**, Sp. Pl. ed. 1, 899 (1753) — Botschantzev in Fl. URSS. 26: 119 (1961).

var. ***longiligulata*** Hara, var. nov.

*Achillea sibirica* Ledeb. sensu Kitamura in Acta Phyt. Geobot. 8: 120 (1939), p. p.; Comp. Jap. 2: 324 (1940), p. p.

*A. alpina* L. sensu Kitamura in Acta Phyt. Geobot. 23: 2 (1968), p. p.; in Satake et al., Wild Flow. Jap. 3: 162, t. 130. 3 (1981).

Differt a typo (var. *alpino*) praecipue ligulis corollae 3.5–5 mm longis. Capitula 7–10 mm in diametro. Involucra globoso-campanulata ca 5 mm diametro, parce pilosa.

Typus: Honshu. Aomori: Ichiyangi-numa, Kamikita-gun (H. Hara, S. Kurosawa & Y. Tateishi, Sep. 16, 1974, fl.) in TI.

This variety is somewhat intermediate between subsp. *alpina* and subsp. *japonica* (Heimerl) Kitamura.

45) オオバユキザサとミドリユキザサ 大井博士 (1934) が日本のユキザサ属をまとめられてから、オオバユキザサ (*Smilacina hondoensis* Ohwi) の名が広く用いられてきた。しかしその当時からこれとミドリユキザサ (*S. viridiflora* Nakai) との関係が気になっていた。大井博士はヒロハノユキザサ (*S. yezoensis* Franch. et Sav.) の

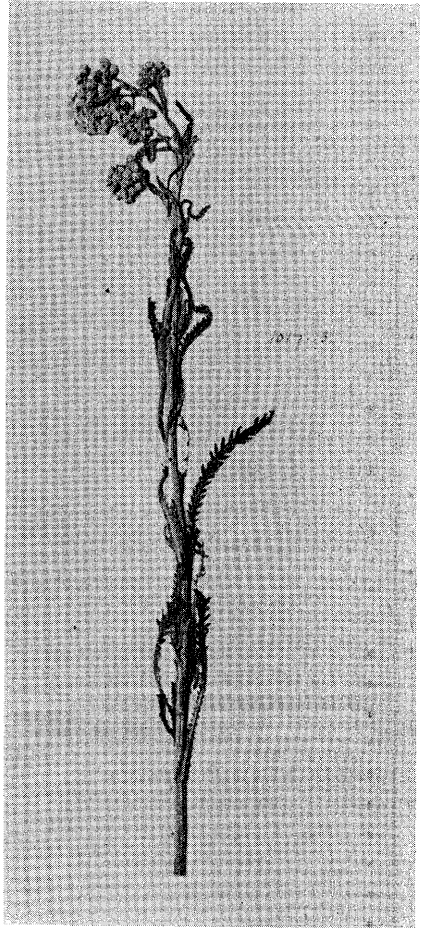


Fig. 1. *Achillea alpina* L. Holotype. Linn. Herb. No. 1017.13.

項で、中井博士は上高地天然記念物調査報告で「雌雄異株で花の緑色のものをユキザサと区別してミドリユキザサと命名された」とのべて、これをヒロハノユキザサの異名とされた。ところが中井博士の上記の報告をみると、その植物目録にはユキザサの外に、‘348. *Smilacina yesoensis* Franch. et Sav. クロユキザサ’ と ‘349. *Smilacina viridiflora* Nakai ミドリユキザサ’ とが並記してある。即ち中井博士はヒロハノユキザサとは別に、雌雄異株で花が緑色の大形のユキザサに対しミドリユキザサと命名されたと解釈すべきで、それは大井博士のオオバユキザサに外ならない。上高地には実際ヒロハノユキザサとオオバユキザサの両方が産し、東京大学の標本からもこのことがうら付けられる。中井博士の上高地採集品 (1927) は標本がくさりかけたものが多く御不満だった様子で、ラベルも時に誤っている。徳本峠で採集されたユキザサ類の標本もかなり傷んでいるが、花が残っているものがあるが同定はできる。中井博士が *S. yesoensis* と同定された 3 枚の標本は皆間違いなくヒロハノユキザサである。*S. viridiflora* と手記された標本は 3 枚あり、その中で花序をつけた 2 枚は大井博士のオオバユキザサにあたり、ひどく傷んだ 1 枚だけはヒロハノユキザサである。中井博士が *S. viridiflora* を欧文で正式に発表されなかったのは遺憾であるが、短い和文ながら生時観察されたよい特徴が記されているので、現行命名規約上は正当な出版とみなされる。牧野・根本、日本植物総覧増補版 (1931) にも同じ和文記載が引用されている。

和名についても混乱がある。そもそもオオバユキザサという名は飯沼齋翁、草木図説 6 巻 12 図に始まるが、これを正確に同定することは難しい。小石川植物園草木目録後編 12 (1881) および日本植物名彙 181 (1884) では ‘*Smilacina japonica* A. Gray forma major’ の和名に用いられ、東大でこの学名が記されている日光産の標本はハルナユキザサである。一方、帝国大学植物園植物目録 224 (1887) ではオオバユキザサは *S. yezoensis* Fr. et Sav. の正名として用いられ、ヒロハユキザサと同一とされている。これが植物名彙改正増補 277 (1895) になるとオオバユキザサの名が削られ、ヒロハノユキザサとなっている。その後中井博士等は朝鮮・日本産の大形のユキザサを *S. japonica* var. *mandshurica* Maxim. にあて、オオバユキザサの和名を用い、北大でも同様な取扱いがされている (宮部・工藤 1932)。また大井博士 (1934) も検索表では *S. hondoensis* にヤマトユキザサの名を用いている。このようにオオバユキザサの名は色々の形に用いられてきていて混乱を起し易いので、和名にはミドリユキザサを用いたい。この植物にはまだ問題があるが、それは別に書く予定である。

***Smilacina viridiflora* Nakai, Rep. Veg. Kamikōchi 36 & 42 (1928), cum diagn. japon.—Makino et Nemoto, Fl. Jap. ed. 2, 1565 (1931).**

*S. hondoensis* Ohwi in Acta Phyt. Geobot. 3: 126 (1934).

Typus: Honshu, Nagano: Tokugō-tōge, Shimashima side (T. Nakai, Jul. 11, 1927, ♂-fl.—lectotype of *S. viridiflora* Nakai) in TI.

Nom. Jap. Midori-yukizasa (Nakai 1928), Yamato-yukizasa (Ohwi 1934).

46) *Ungernia Oldhami* Maxim. の正体 日本産として記載されたにも拘らずその正体がいまだにはっきりしない植物がまだ少数残っているが、これもその一つである。この新種は Maximowicz が日本を訪れた時、東京附近で植物に関心のある人から1本の花茎を貰ったのに基づいたものである。彼はこの植物は Oldham が日本で採集して、Bentham, Hooker (1883) が *Lycoris Severzovii* Regel (中央アジア産) とよく一致するとした標本と同じであると判断して、標本を見ずに *Oldhami* という種名をあたえた。しかし Baker (1888) は Oldham の採品はキツネノカミソリであって別物であるとしたので、種名の意味がなくなってしまった。

この植物が何であるか気になったので1958年 B.K. Schishkin 博士に頼んで基準標本と花粉を調べて貰ったりした。キツネノカミソリに近いと思ったが、更に1975年レ

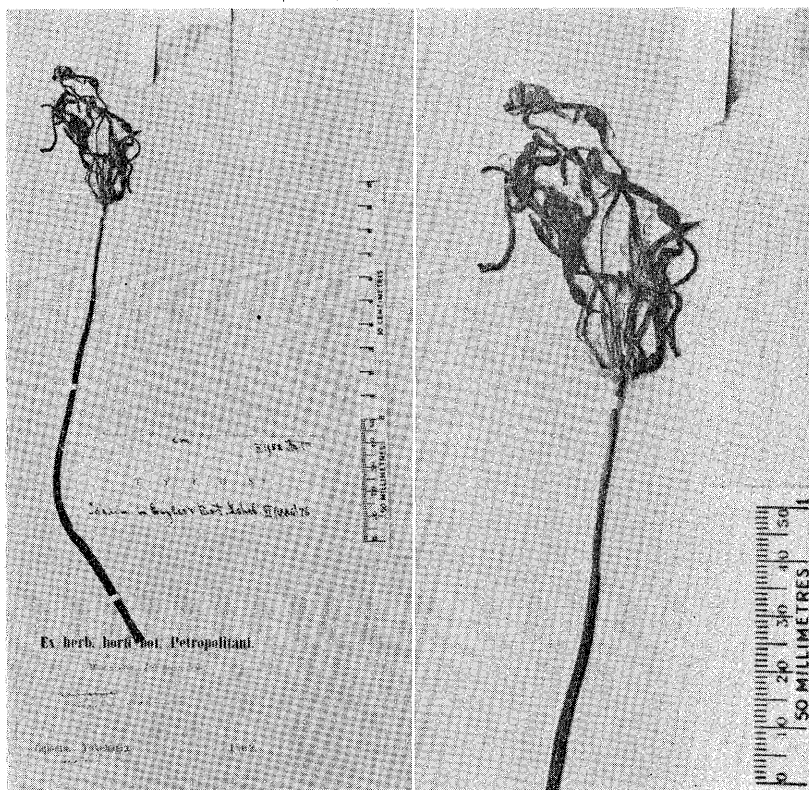


Fig. 2. *Ungernia Oldhami* Maxim. Holotype. Leningrad.

ニングラードを訪れた際にそのタイプを再検した。タイプ標本 (Fig. 2) は、花がしなびていて分り難いが、ラベルには 'Yokohama. 1862' とあり、鉛筆で花のスケッチや解剖図とメモが書きこまれている。また '*Lycoris Oldhami* m.' と学名が書かれているのも面白い。花は小さく、花筒は長さ約 1 cm、花被片は長さ 2-2.5 cm で鈍頭、葯は長さ 4.5 mm である。花が小さいが、キツネノカミソリでも貧弱な咲き初めの個体ではこれ位の大きさの標本も見られるので、やはりキツネノカミソリと判断する。両学名は同時の出版で、ページは *Ungernia Oldhami* の方が早い、使い馴れた *Lycoris sanguinea* を採用したい。

*Lycoris sanguinea* Maxim. in Engl., Bot. Jahrb. 6: 80 (1884).

*Ungernia?* *Oldhami* Maxim., l.c. 76 (1884)—Baker, Handb. Amaryll. 39 (1888)—Matsumura, Ind. Pl. Jap. 2(1): 222 (1905)—Traub et Moldenke, Amaryllid. Trib. Amaryllaceae 164 (1949); syn. nov.

Type of *Ungernia Oldhami*: Japonia, Yokohama (Maxim. 1862, one flowering scape) in LE.

□清水敏一：大雪山わが山 小泉秀雄 264 pp. 1982. 清水敏一 (私費出版), 岩見沢市. ¥2,500 (送料 300). 北海道, 大雪山彙には人名を冠した山が多く, 間宮岳 (間宮林蔵), 桂月岳 (大町桂月) などがあり, また小泉岳 (小泉秀雄) がある。本書の著者は登山家であることから, 大雪山学術調査登山の先駆者であり, また山名にも名前が残っている小泉秀雄の経歴や業績に興味をもち, 2 年余の精力的な調査結果をまとめたものである。本書では, 小泉秀雄の生涯, 大雪山とのかかわり, 山行歴と採集歴などが述べられており, とくに第七章, 山岳書のなかの小泉秀雄の項では, 山岳書に紹介された小泉の人物像や当時の登山調査の実情が記されていて興味深い。小泉は 20 万点におよぶ植物標本 (蘚苔, 地衣を含む) を採集したが, そのコレクションは幸にして科学博物館に現在収められている。本書は登山家としての小泉を紹介したものであるが, その植物標本を利用するに際しても, 重要な資料となるであろう。私費出版であるため購入希望の方は〒068 岩見沢市緑が丘 5-166 の著者に連絡のこと。 (黒川 遼)